

義務教育段階における陸上競技(陸上運動)の授業づくり

—他競技の動きの視点から—

松下 綾乃 (鹿児島大学)

1. 目的

陸上競技は、他競技にもつながる基礎的な動きであるとされている。しかし、当該領域の授業で楽しさを感じにくい児童生徒が多いことも知られている。そこで、本研究では、陸上競技を楽しみつつ、基礎的な動きが身に付く授業づくりへの知見を得ることを目的とした。

2. 研究方法

陸上競技の動きは他競技の動きの中に存在することを踏まえ、各競技の得点や勝敗につながるような重要場面の動きを抽出・分類した。それらを基に、スキルウォーミングアップを作成・実践・評価・精選し、授業の導入に用いることとした。さらに、児童・生徒の動きを平等に評価するための評価基準を作成・検討し、用いることができるようにした。

- 1) 対象者：大学生 22 名
- 2) 調査・分析：陸上競技の授業に関するアンケート調査を行った。また、他競技の試合から頻出する動きを抽出した。

3. 結果と考察

1) 他競技の動きの抽出・分類

競技の中でも多様な動きが頻出する球技を対象として分析した。

サッカー、バスケットボール、ハンドボールでは、ダッシュやドッジング、バックステップ。ネット型では、サイドステップやスタッター。ベースボール型では、クロスステップなどが特徴的な動きとして抽出し、動きの目的や性質に基づき分類した。

2) スキルウォーミングアップの作成

基礎的な動きを身に付けつつ、運動への興味関心の向上を担保したスキルウォーミングアップが 6 個作成された。さらに、それらを弾力的に使用できるように、動きの種類や体力的負担等を考慮したうえでグルーピングを行った。

3) 動作の評価基準の作成

走運動、ハードル走、ジャベリックスローの評価基準を作成した。これは、タイムや記録ではなく、運動動作自体を評価することを企図している。これにより、身体能力に依存しない運動の評価が可能となると考えられた。

4) 授業実践

作成されたスキルウォーミングアップの後、当該領域内で体の使い方の異なる複数種目(短距離走、ハードル走、走り幅跳び、ジャベリックスロー)を用いた 4 種競技を取り入れた授業を行った。

その結果、楽しさを感じつつ、動きへの気づきが深まること。加えて、他競技への類似性や汎用性を認識させられることが確認された。

4. 結論

本研究の結果、技能を身に付けるとともに、楽しさを感じられる陸上競技(陸上運動)の授業を成立させるためには、他競技の動きと関連付けること、仲間と楽しく動きを身に付けること、技能を正しく評価すること、当該領域内で体の使い方の異なる複数の種目を用いた学習過程が構成されることが重要であることが確認された。